

國學院大學學術情報リポジトリ

「国家」と「個人」の狭間： 五味川純平の「満州」体験と『人間の条件』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 五味川純平, 「満州」体験, 『人間の条件』, ヒューマニズム, 戦争と植民への批判 キーワード (En): Junpei Gomikawa , “Manchurian” Experience , The Human Condition , humanism , criticism of war and colonization 作成者: 王, 碩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001642

「国家」と「個人」の狭間

—五味川純平の「満州」体験と『人間の条件』—

Between “Nation” and “Individual”:

Junpei Gomikawa’s “Manchuria” Experience and *The Human Condition*

王 碩

キーワード：五味川純平 「満州」体験 『人間の条件』 ヒューマニズム 戦争と植民への批判

Key Words: Junpei Gomikawa “Manchurian” Experience *The Human Condition* humanism criticism of war and colonization

要旨

「満州二世」の五味川純平は29年間の「満州」体験に基づき、戦争の非人情に虐待された人間の生きる姿を文学創作で表している。本稿では、五味川のデビュー作——『人間の条件』を研究対象として、作家の体験と創作の関係を切り口に、文学に見る戦争という極限状況下の「国家」と「個人」の力関係を考察するうえで、戦争が人間性に対する徹底的抹殺を明らかにした。それに基づき、人間が人間として生きる可能性について作家の思考を探ってみた。また、「国家」「戦争」「人間」の三位一体の構造に、それぞれの位置づけの判明を試みた。さらに、作品に漂っている戦争の強い反省意識と結び付けて検討し、「五族協和」「王道楽土」の偽善に隠された戦争と植民の罪悪を暴き出すことにより、『人間の条件』の文学史的・思想史的位置づけを見直した。

Abstract

Based on his 29-year experience in “Manchuria,” Junpei Gomikawa, a “second-generation Manchurian,” expresses in his literary creation the way of life of people abused by the inhumanity of war. This paper takes Gomikawa’s debut novel, *The Human Condition*, as the object of study, and, using the relationship between the author’s experiences and his creative works as a starting point, examines the power relationship between “nation” and “individual” in the extreme situation of war in literature, and reveals the thorough obliteration of humanity by war. Based on this, we have shown that war is a thorough erasure of humanity. Based on this, we explored the writers’ thoughts on the possibility of human beings living as human beings. We also attempted to discover the position of each in the triune structure of “nation,” “war,” and “human being. Furthermore, by examining them in connection with the strong sense of remorse for war that pervades the work, and by exposing the guilt of war and colonization hidden in the hypocrisy of “harmony among the five races” and “royal paradise,” I reviewed the literary and ideological historical position of *The Human Condition*.

はじめに

近年来、戦時中の「満州」を題材とした作品は、どんどん注目されるようになった。1904 年日露戦争が勃発し、日本は勝者として再び遼東半島を含める中国東北地方の南部を奪い取り、東北に対する侵略・植民を始めた。1931 年「9・18 事変」が起こり、その以後約 14 年の長い間に中国東北地方は日本の植民地として統治されていた。日本は移民政策を行い、敗戦までおよそ 20 万以上の日本人が東北地方に移住した。その移住民の中から、様々な中国東北に関する作品が誕生した。特に多重身分で、極強い反省意識を持つ五味川純平 (1916-1995) が創作した『人間の条件』は、ベストセラーとして世間には大きな共鳴を呼んでいた。このまれに見る真実の歴史体験に基づく客観的・反省的作品を中国と日本文学の関係を研究することに置けば、歴史的・文学的意義が顕れる。

中国では『人間の条件』の先行研究について、論文はわずか二篇ある。文潔若氏の「五味川純平と彼の創作」⁽¹⁾では、五味川純平の青少年時代の経歴が少し言及され、『人間の条件』と『戦争と人』を例として、作品のあらすじを紹介し、五味川の戦争に対する反省意識を述べている。また、筆者の論文「五味川純平の中国東北体験と文学創作」⁽²⁾では『人間の条件』を研究対象として主人公「梶」の経歴によるヒューマニズムの変遷を分析する上で、戦争と人間関係を検討し、戦争と植民の罪悪を批判している。

日本では高橋啓太氏は「戦後の鞍山を描く——五味川純平『人間の条件』『歴史の実験』」⁽³⁾、「五味川純平の中国観と『人間の条件』——第一部・第二部を中心に」⁽⁴⁾、五味川純平『『人間の条件』に関する序論的考察』⁽⁵⁾を発表した。それぞれに、「敗戦後の鞍山体験をどのように作品化したか」、「主人公「梶」の人物造形を批評する」、「作品がベストセラーとなった原因と先行研究」をめぐり、論じている。

(1) 文潔若、五味川純平和他的创作、日语学习与研究、1992 (1)。

(2) 王碩、五味川純平の中国東北体験と文学创作、文化创新比较研究、2020(3)。

(3) 高橋啓太、「戦後の鞍山を描く——五味川純平『人間の条件』『歴史の実験』」、花園大学文学部研究紀要、花園大学文学部、55 号。

(4) 高橋啓太、「五味川純平の中国観と『人間の条件』——第一部・第二部を中心に」、花園大学文学部研究紀要、花園大学文学部、53 号。

(5) 高橋啓太、「『人間の条件』に関する序論的考察」、花園大学文学部研究紀要、花園大学文学部、52 号。

川村湊氏は詳しく『人間の条件』という作品が戦後の「ベストセラー」になった原因と作品の内容、また作品の歴史的な意義を分析している⁽⁶⁾。塩見鮮一郎氏は、比較的詳しく原文を引用し、主人公「梶」の三つの段階での生きている姿を分析し、主人公の性格と経歴を述べている。そして『人間の条件』を戦争文学の傑作と認めている⁽⁷⁾。扇谷正造氏は「文学的感銘」と「人生的感動」に焦点を置いて、ほかの評論家の言論を結び、作品を分析している⁽⁸⁾。尾崎秀樹氏は、作品のあらすじを紹介するうえで、小説の魅力は「しろうと性」と指摘している。読者からの「大衆文学」に関する受容の視点から、『人間の条件』の革新的な性格を述べている。最後には、この作品は五味川文学に対する意義を触れている⁽⁹⁾。また村上兵衛氏⁽¹⁰⁾、桜井増雄氏⁽¹¹⁾は作品の主題や作文の手法を言及している。他には、小松久美子氏⁽¹²⁾や堀秀彦氏⁽¹³⁾などの研究者の成果を含め、約30篇がある。

以上のように、中国では『人間の条件』についての研究は少ない一方、日本での先行研究は中国より多く、川村湊氏のような名評論家も『人間の条件』を評論したことがある。研究する内容について中国では作品内容の紹介と簡単な分析に終始する。一方、日本では作品の価値の分析と主題、人物の研究に焦点があてられるが、五味川の「満州」体験と創作の関係また「国家主義」と「個人意志」の関係に注目するのはあまりなかった。確かに、高橋啓太氏は「戦後の鞍山を描く——五味川純平『人間の条件』『歴史の実験』」(『花園大学文学部研究紀要』、2023)には、五味川の鞍山体験を言及したが、実は『人間の条件』に描かれた鞍山体験はほんの少しである。これはただ『歴史の実験』(戦後鞍山体験に基づく作品)に関する研究への架け橋と思われる。

本稿は、「戦後に書かれた多くの戦争文学の集大成」⁽¹⁴⁾と評価された五味川の代表作である『人間の条件』を研究対象とする。先行研究特に筆者の前作を踏まえ、

(6) 川村湊、「『人間の条件』(1956-1958) 五味川純平(1916-1995) ——語り継がれた植民地と戦争の『記憶』」, 現代思想, 33巻7号。

(7) 塩見鮮一郎, 「五味川純平『人間の条件』——あの“戦争”に協力というかたちをとりながらもその中で反抗してきた梶ヒロイズムの限界」, 創, 9巻10号(通号96)。

(8) 扇谷正造, 五味川純平「『人間の条件』現代的“求道の書”」, 朝日ジャーナル, 8巻37号。

(9) 尾崎秀樹, 「状況からの脱出」, 文芸, 2巻7号。

(10) 村上兵衛, 「『人間の条件』論」, 新日本文学, 13巻6号。

(11) 桜井増雄, 「快作『人間の条件』について」, 社会主義, 8巻84号。

(12) 小松久美子, 「五味川純平著『人間の条件』」, 歴史地理教育, 3巻8号(通号22)。

(13) 堀秀彦, 「西部劇『人間の条件』」, 新潮, 55巻7号。

(14) 長谷川泉, 『近代日本文学:鑑賞から研究へ』, 明治書院, 1958年, p253。

作家の「満州」体験と創作の関係に焦点をあて、ヒューマニズムの移り変わりを考察する上で、新たに戦争という極端な歴史的背景にある「国家主義」と「個人意志」の矛盾を検討したい。その上で、「人間になれる条件」を考察し、作家の価値判断を明らかにする。さらに、それを通じて、作家が希求している精神への「復員」、戦後の清算と反省を見直す。

一、故郷としての「満州」:精神的な混血児

1916年3月15日、五味川純平は、日露戦争で日本軍の兵員や糧秣が揚陸された港、柳樹屯で生まれた。「私の父は、日露戦争の直後に大陸に渡った『満州草分け』のひとりである。だから、満州で生まれ、育ち、高等教育の間だけ内地へ移り、卒業後満州で就職した私は、典型的な『満州二世』ということになる」⁽¹⁵⁾。五味川の言うように、彼は「満州」で生まれ、「満州」で育った人間である。1943年昭和製鋼から鉱山弓張嶺（『人間の条件』では老虎嶺）の労務管理に転職した。何度も日本人管理者の暴行に抗議を申し込んだ挙句、軍隊という「真空地帯」に「放逐」された。その後、彼は戦争の消耗品——一兵卒として戦闘に参加した。敗戦後、約五ヶ月の逃亡生活が続き、1945年12月に半死半生で出身地に帰還した。

柳樹屯という町で、五味川純平は中国人と混在し、子供の時はよく中国人の子どもと遊んで、授業も一緒に受けた。「子どもの間では摩擦はなかった」⁽¹⁶⁾と言ったように日常生活では、中国人の乳母に世話をされ、いつの間にか中国語を覚えていた。つまり子供の時から彼はすでにその土地に溶け込んでいたと言えよう。「だから、日本人は『満人は汚い』とか『教育がない』とか、これを規定の事実であるかのように言っていたんですが、私はそういう特殊な生活をしたせいか、そういう差別意識は微塵もないので、そういうことをいう日本人が私は不思議だったん」⁽¹⁷⁾と。しかし、中国人に対する「差別意識」はないということは、明らかに植民体制とだいぶ外れているのであろう。「植民」といえば、必ず支配と被支配の関係において行うのである。いわゆる「五族協和」「王道楽土」⁽¹⁸⁾などはただのス

(15) 五味川純平、「原点としてのわが戦争と人間 原点としてのわが戦争と人間——自らが足下に踏みにじった民族の“痛み”とは」, 潮, 通号142, p192。

(16) 家永三郎, 五味川純平, 「近代思想史の欠落部分」, 思想の科学, 第5次, 126号, p14。

(17) 家永三郎, 五味川純平, 「近代思想史の欠落部分」, 思想の科学, 第5次, 126号, p14。

(18) ここの「五族協和」「王道楽土」は「偽満州国」の民族政策の標語で、日・韓・「満」・蒙・漢の

ローガンだけで、偽善的な仮面下の日本植民者の野望は戦争が進行するとともに浮き彫りになってきた。1940年、五味川は鞍山の昭和製鋼所に就職することになった。同じ部落で生活しているが、中国人の生活水準は非常に低い。五味川は以下のように書いた。

配給なんていうもののまるで違いますね。……昼食は、日本人が当時南京米と言っていたパラパラの米でしたが、ともかく米を食べていたんですが、中国人は真赤な弁当なんです。最初にみたときはびっくりしたんですけど、高粱だけなんですね。それから綿布の配給なんかでも三～四倍違ってたんじゃないでしょうか。

(中略)

住居条件も大分違ってたのです。私の会社の例ですと、日本人の社員は独身者ですと独身者寮に入れましたし、妻帯者には、八畳と六畳と四畳半の部屋に風呂つきの社宅がありました。中国人の宿舍もあるにはありますが、較べ物になりません。それどころか、毎年八〇万人から百万人にのぼる、主に山東あたりから輸入されてきた苦力(クーリー)の宿舍では、一人当たりの面積が、縦巾は七〇センチぐらいというような、それはもうひどいものでした。⁽¹⁹⁾

実際に体験したうえで、五味川は「平等互恵なんていうことは、それは作文にすぎないですね。」⁽²⁰⁾と客観的にその「偽善の嘘」の本質が見透かしていた。しかし、ここで注目したのは、五味川の「植民者」と「偽原住民」の二重身分ということである。生まれながらの「植民者」身分で「異郷」生れ、「異郷」育ちであったが、「原住民」とは言えない。つまり、精神的には周りの中国人と「差別はない」と認識しているものの、肉体的には「植民者」の印が最初から刻まれたのである。言い換えれば、「植民者」として、「被植民者」に同情するという「非常識」だと思われる。特に1931年の「満州事変」から1945年敗戦まで、日本国家主義の高圧下、「個人主義」の居場所はなくなった。日本国内また「満州国」では、経済・政治・

五民族が協調し、アジア的理想国家を造ることを指す。

(19) 家永三郎、五味川純平、「近代思想史の欠落部分」, 思想の科学, 第5次, 126号, p15。

(20) 家永三郎、五味川純平、「近代思想史の欠落部分」, 思想の科学, 第5次, 126号, p20。

社会などの方面における高度的な統制政策が実施された。そのような状況で、「異郷を故郷とする」五味川の内面には非常に矛盾しているのであろう。逃げられない日本植民者身分と捨てられない中国「住民」身分のダブル制限を受け、精神的な混血と肉体的な単一性の衝突が起こっている。これにより、彼は文学を手段として、『人間の条件』には「個人」的な「理想」と「国家」的な「大義」の両立を実現するようにやってみた。五味川は一般的な「満州二世」の作家と異なり、彼には「植民」「軍隊」「敗戦」という三つの体験がある。このように複雑な体験があったからこそ、『人間の条件』という「反時代」の快作を創作できるといえよう。

二、「国家」に挑戦する「個人」：ヒューマニズムの発足

1943年の秋、五味川は弓張嶺（小説においては老虎嶺）の鉱山で中国人工人の責任者として労務管理に従事した。そこで、非人間的に扱われていた中国人工人を見るに忍びなく、直ちに中国人労務者の待遇改善を求め始めた。彼はいつも工人の立場に立ち、生産量を上げる対策を提出した。五味川は以下の通りに言う。

『中国人労務者の待遇改善』がテーマになったときである。部分的には小説『人間の条件』のはじめの方にも書いたが、当時の状況下では緊急増産対策として、中国人労働者の能率をいかに引き上げるかが大きな問題となっていた。従来のような鞭一点張りのやり方では、どうにもならないのだ。劣悪な給与で、ぶっ倒れるまで酷使しても、補充がどしどし利くという状態では、もはやないのである。この袋小路から脱出する方法として考えられることは、中国人労働者にたいする食糧その他の現物給与を思いきって引き上げることしかなさそうであった。⁽²¹⁾

1938年4月日本政府は「国家総動員法」を公布し、「国防目的達成ノ為国ノ全力ヲ最モ有効ニ發揮セシムル様人的及物的資源ヲ統制運用スルヲ謂フ」⁽²²⁾と定められたように、いわゆる「総力戦」体制への移行が本格的に開始した。農業・工業・

(21) 五味川純平、『極限状況における人間』。三一書房、1973年、p80。

(22) 企画院、『国家総動員法令集』。内閣印刷局、1942年、p1。

金融・教育をはじめ、すべての領域を国家統制に組み入れた。五味川が勤めていた鉦山では「緊急増産対策」に従い、中国人労働者を死ぬほど圧搾することはその「総力戦」体制の表しと思える。しかし、五味川は他の管理者と異なり、増産のためにひたすらに中国人労働者を働かせることなく、食糧や給与の改善を通じて、工人の積極性を高めた。

小説には、五味川は主人公「梶」という強権に直面する「反時代」のヒューマニズムを提唱した人物像を作り上げた。「梶」は日本のインテリの代表者として位置づけられ、学生時代には、左翼運動に関する経験があった。そのあと、鉄鋼会社に入り、左翼的な傾向のある「植民地的労務管理の諸問題——主として老虎嶺の労務事情に関して」という報告書を書いた。この報告書は「人間を人間として扱う」というテーマをめぐり、当時と逆行する意見を出した。しかし、部長はこの報告書に疑問を出した。

「支那労働者を出来るだけ搾取して、この巨大企業が成立している。そうだね？」

「そうです」

「すると、君の持論とは根本的に矛盾しやしないかね？」

(中略)

「……矛盾してます。しかし矛盾していなければ、そんなものを書く必要はありませんでした。」⁽²³⁾

矛盾しているとわかっているが、解決しようとしていた。「梶」は揺るぎないヒューマニズムの持ち主として自分の内面に直面し、「人間性」を守る道で歩んできた。

小説には、日本植民者の統治下、中国工人は非人間的に扱われ、人間としての基本的な尊厳もなかった。「山の上から見れば整然として美しくさえ見える赤煉瓦造りの工人宿舍も、近寄れば異臭が漂っている。家と家との間には、いつも汚水が流れてじめじめしているし……」⁽²⁴⁾。工人の住所は非常に劣悪な環境にあり、そして、食糧の配給も不公平である。現場監督岡崎の妻は公然として三十斤の

(23) 五味川純平、『人間の条件』。三一書房、1963.6、p18。

(24) 五味川純平、『人間の条件』。三一書房、1963.6、p89。

「パイメン」を持ち帰る。その一方で、中国人労務者「陳」はお母さんのために、「パイメン」を得ようとするが無駄であった。また、戦争のような厳しい状況下、日本人官僚は中国人の土地で恬としてそもそも中国人の資源を自分のものにし、中国人を搾り取り、贅沢三昧の生活をしていた。それらの軍人や長官が視察の名目で、山の部落で食糧などを最大限に取り寄せる。しかし、そこまでとどまらず、中国工人に暴力を振るうこともよくあるのだ。小説においてそのようなシーンはこう描かれている。

「どうしたんだ？」

「現場で、岡崎さんにやられたらしいんです」

被害者の顔は血にまみれて、眼鼻立ちもわからなくなっていた。

「診療所へ急いで！」⁽²⁵⁾

慰安所から戻った「梶」は、その場面会った。彼は殆ど死んでいる負傷者を見、「岡崎だな！」と叫んだ。翌日、「梶」は所長のところに行き、「工人の生命だって消耗品ではありませんよ。僕は岡崎を傷害致死で訴えます」⁽²⁶⁾と抗議した。しかしながら、所長は「暴力は確かに悪いが、それが鉄鉤増産のための愛国心」と弁解した。

この「愛国心」は、文字通りの意味ではないと思う。これについて、「丸山真男」は一九五一年の論文で、戦前の教育は個々人の責任意識に根ざした愛国心を育てたのではなく、『忠実だが卑屈な従僕』を大量生産したにすぎなかったと論じている⁽²⁷⁾となる。多分、その「岡崎たち」は「愛国」はなんだろうかもわからない。上からそういう「増産指令」が下ったので、ひたすらその目標を実現するように前進する以外は何もできない。方法や結果などは構わなく、ただ「国家」の需要に応じるだけで十分である。その極端な歴史的背景に、「国家」は「個人意志」を統制し、「個人」は無条件に「国家」を信頼するべきである。結局、「傷害致死」まで許される変態状況に陥ると言えよう。ですから、「梶」のような「反逆行為」は受け入れられないのは当然だろう。原文には「梶が中国人工人の処刑の中止を叫

(25) 五味川純平、『人間の条件』、三一書房、1963年、p128。

(26) 五味川純平、『人間の条件』、三一書房、1963年、p128。

(27) 小熊英二、『＜民主＞と＜愛国＞戦後日本のナショナリズムと公共性』、新曜社、2003年、p63。

んで、その肉体で軍曹の銃と対抗した。」という場面があり、それは彼のヒューマニズムの最後の発露となった。

「やめて頂く」

はっきり云ったつもりだが、自分の声がまるで借りものとししか聞こえなかった。

渡合はことの意外さに一瞬は啞然となったが、胸を張って立っている梶に対して、俄かに兇暴な怒りが吹き上げてきた。

「どけ！出しゃばると貴様も叩っ斬るぞ！」

「それが怖くていままで動けなかった」

と、梶は、ぞくぞくと肌に粟を生ずるような快感と恐怖に慄えながら、だが、今度こそは自分の声で云った。

「俺は動いたぞ。斬れるものなら斬ってみろ」⁽²⁸⁾

中国人捕虜の処刑を中止させたため、「梶」は軍隊に連行され、拷問を受け、職も追われた。一兵卒として戦場へ送り出された。巨大な「国家」に覆われている「個人意志」——「ヒューマニズム」はその制限を突破しようとしても不可能に近くである。

三、「国家」に妥協する「個人」：ヒューマニズムの動揺

1943年11月から五味川は植民地の労務管理者から兵隊に変わり、軍隊体験が始まった。1945年8月の敗戦までに、約二年間軍隊で暮らした。このことに触れて彼は「惨めさははじまったばかりであった。いまや、男たちは自分の意志を持った人間であることをやめて、溶解されて、鋳型に入れられて、規格どおりの兵隊として鋳型から出て来るほかはないのである。」⁽²⁹⁾と言っている。ヒューマニストの彼は、その人間性を抹殺するメカニズムの中で、人間であることに徹しようとして艱難辛苦に耐えていた。

(28) 五味川純平、『人間の条件』。三一書房、1963年、p301。

(29) 五味川純平、『虚構の大義—関東軍私記—』。三一書房、1974年、p15。（この小説では杉田という主人公の名を借りて作者の実体験が語られている。）

東京外国語大学を卒業した五味川は、知識階級に属していると言える。動乱の時代の在学中に彼はすでに社会主義運動に参加し、よくマルクスとレーニンを読んだ。原口一郎氏によると、その時期、五味川はマルクスに憧れ、体制の拘束に反発する自由主義者の性格を養った。それは彼が後の軍隊生活を正義と道理で生き抜こうとした原動力と考えられよう。前文も言及したように、その時期は「総力戦」の極端な歴史的背景下、日本また「満州国」全境が完全に統制されていた。日本軍部はそもそも国防に専念する「特殊な集団」であるが、ファシズムの台頭と「満州事変」陰謀を達成することで、1934年から政治・経済に手を出すことが始まった。1936年2月29日に日本陸軍皇道派青年将校より起こした軍事政変が失敗した。そのうちに、東条英機をはじめ、統制派は皇道派軍人の政治勢力を片づけ、日本の「軍国主義」が強化された。「軍国主義」はすでに国民生活の最上位に置くことになった。軍隊は「軍国主義」傘下の最も有力な「組織」として、「侵略」行為を実施する主体である。「総力戦」体制の影響を受け、日本国民は「自己意識」が喪失し、戦争を推進するため、狂ったほどの「情熱」は湧き出した。ということで、「軍隊」のように本来である「人間性を抹殺するメカニズム」は、さらにひどくなったと言えよう。

軍隊は上下関係が極めて厳しい組織である。つまり、年次により、長ければ長いほど特権が大きくなる。最も悲惨なのは初年兵である。特に始めの検閲を終わっていない初年兵はまだ兵士でさえない。そのために、人間以下どころか、軍馬以下として扱われた。古参兵たちは、初年兵の何から何までを監視した。もし初年兵が自分の気に入らなければ、ビンタである。これは、新兵に対するしごきの一種である。これについて五味川は、「新兵に対する古参兵のしごきは壮烈を極めた。新兵の体はたまったものじゃない。負傷する者、病気になる者が相次ぎ、辛さに耐えかねて逃亡する者、自殺する者も出るありさまであった。」と述べている⁽³⁰⁾。寸暇も与えないように管理された内務班生活、厳しい軍事訓練で新兵は精神的にも、生理的にも巨大な圧力を受けていた。例えば、五味川はかつて連続上番をさせられた。一般的には24時間で下番するのであるが、彼は三日夜連続上番で、一日下番であった。ただし、その下番の一日は練兵と内務をしなければならない。彼はこれを苦しい経験と述べている。このような毎日の激しい訓

(30) 原口一郎、「自主こそ人間の生きる道作家五味川純平」、産業、23巻2号(通号257)、p185。

練で、彼は心身の疲労が限界に近付いているのを意識した。「一等国民」から「軍馬以下」の二等兵に転落し、身分転換のうちに、彼の心理も変わっただろう。ここでは、彼が言った「そういう特殊な生活をしたせいか、そういう差別意識は微塵もないので」をもう一度検討すれば、注目すべきなのは「特殊な生活」である。つまり、「被植民国」で滞在する「植民者」の立場からすると、「植民者」自身には圧迫や非難されていないから、「ヒューマニズム」を孕みやすいと言えよう。しかし、軍隊の最下位の兵士だったら、自分を守る能力すら持っていないから、「軍国主義」の桎梏を突破しようとしても不可能だと思える。

最初に、彼はまだ「抵抗」し続けていた。初年兵のときに、「将校は命令しなければなりません。兵隊を死地に投じなければなりません。私はその場合、遅疑逡巡すると思います。」⁽³¹⁾という理由で幹部候補生試験を断った。また、「内務班の改革」を求め、つまり古参兵の特権に挑戦し、一般的兵士の人間としての尊厳を守ろうとした。だが、一人の二等兵の肉体は「軍国主義」の体制に勝たないと言えよう。その限界はいつの間にか訪れた。これについて、彼は実体験に基づき、「検閲行軍」(完全軍装して50キロを走破する野営訓練)を文学的手段で『人間の条件』において再現した。

検閲の最終日、完全軍装の上に国境の「陣地移動演習」が行われていた。十キロと来ないうちに、「小原」はもう体力がなくなると感じた。柴田兵長が「小原」の代わりに助を求めたが、梶も聞こえなかったふりをして歩いていた。彼はこれを「体力の限界」と言い訳した。本当に「限界」となったかどうかは推測できないが、これは「梶」らしい言い方ではない。つまり、いまの「梶」にはもう利己主義が兆し、労務管理時代の人道主義者とは外れはじめていた。行軍落伍者は、懲罰されるほかには選べない。反抗できず、頭から「汚水をかぶせられて」「ビンタされた」などを受けなければならない。しかし、その懲罰のほかには最後の落伍者「小原」は「娼妓をまねる」という侮辱的なことを要求された。吉田上等兵はずっと「聞こえないぞ」「手招きせんか、手招きを」と「小原」を迫っていた。もし入隊したばかりの時に、そういう事は起こったら、「梶」はきっと手を出すだろう。しかし、今の「梶」は迷っていた。声を出しようとしていたとたんに、新城からの注意でせっかく湧き上がった氣勢が削がれた。軍隊の因習は巨石のように「梶」

(31) 五味川純平、『虚構の大義—関東軍私記—』。三一書房、1974年、p61。

を抑えつけた。結局、その夜「小原」は自殺した。「梶」は隊長に「小原」の自殺の導火線となった古兵の責任を問っていたが、それは「梶」の妥協で簡単にしりぞげられた。

かつての孤独な善意の猛獣は、だんだん無為な傍観者になってきた。見るに忍びなく、手を出すこともあったが、それは手加減の助けと言えよう。つまり、そのヒューマニズムは妥協せざるを得なく、限界がある人間性の守りである。

四、「国家」に負ける「個人」：ヒューマニズムの崩壊

1945年8月13日、「ソ満」国境でかつて「無敵」と称された関東軍は敗戦した。五味川が所属する軍隊は全滅した。戦闘に参加した158名兵士はわずか4名になった。伍長一、初年兵二、そして五味川純平である。彼たち四人は森林地帯で、東西もわからずに、絶望的な敗走を続けていた。森林地帯のはずれには、死体を見慣れたはずの彼が目をもむけたいような悲惨な光景である。老若男女が生前の最後の動作そのままに死んでいた。「手に豆がらをしっかり握ったままの子供が、老妻を抱きかかえるようにした老人が、女が、男が……それぞれバラバラの位置で、死んでいた」⁽³²⁾。引き揚げていた途中の五味川は引き揚げ者の惨苦の実情を見て、そもそも頼りない状態の上で、一層心細くなったであろう。自分がどこに行けばいいのか、いつか国に戻れるのか、すべて知れないことである。彼たちは五日間森林を彷徨った。その後、五味川は黒竜江省牡丹江市、吉林省敦化市を經り遼寧省鞍山市の「家」に戻った。

遠い道のりであった。気力も体力も萎えていた。瀕死の獣に近かった。行くところも休むところもなかった。最初の日は何に向かって歩き出したか。自主独立の生き方などというものが敗戦国民にあるわけがなかった。⁽³³⁾

約五ヶ月の流離いで、疲れ果ていた五味川は、その時にもう人間ではなく、「瀕死の獣」の状態になった。彼は生き延びるために、盗みから、物乞いまで、

(32) 五味川純平、「原点としてのわが戦争と人間」, 潮, 通号142, p191.

(33) 五味川純平, 『戦記小説集』, 文芸春秋, 1993年, p268.

やらないことはなかった。敗戦棄民に落ち、普通の人間のように生活するのは不可能と言えよう。

「玉音放送」は日本植民者の「海外に雄飛すべし」⁽³⁴⁾の野望が徹底的に破産と宣告した。つまり、戦時の「国家体制」が解体するまで「個人意志」の実現が出来なかった。五味川自分にも敗戦するとともに、人間としての「条件」は失った。これに触れて、原作には「地獄の饗宴」と比喩する戦闘場面と「雪に埋まる末路」の逃亡惨状を描写する。

小説に描かれている戦闘場面は敗戦直前の戦闘である。「戦車群は火蓋を切った。遂に、地獄の饗宴がはじまったのだ。一瞬のやみ間もなしに山が泣き叫んだ。大気は裂けて、咆え狂った。彼方、旺盛な火力を発揮していた陣地は一面に土煙に蔽われ、死神の怒号を浴びて震えていた。」⁽³⁵⁾ 戦闘が終わった時、もう夜明けになった。「梶」が所属する部隊はほぼ全滅したが、彼を含め4人しか残らなかった。ある重傷者が弱い声で「梶」に助けを求めた。しかし、「梶」はその人を見なく、立ち去った。そのような状況では、「梶」にしても助ける気力はないだろう。残酷な戦闘の洗礼を受けたがゆえに、まだ生きている者は、非情の意志を抱えるしかなかった。それから、彼たち4人は途方に暮れる逃亡を始めた。逃亡した途中には、「梶」は感情を持たず、任務を完遂するように人を殺した。自分の命を延ばすために、他人を犠牲にするほかにはない。

逃亡していた日々に、飢餓が続いていた。途中で会った写真屋さんの妻はある夜中、「梶」の食物を盗むつもりだったが、「梶」に阻止された。暗闇の中に、「梶」はまた拳を振り、顔を打った。彼は無慈悲にその女の髪をつかみ、いくら彼女が乞っても、「梶」は食糧を譲らない。彼はかつてペンを握る右手で発狂していた兵長を絞め殺し、歩哨兵を突き刺し、可哀そうな女を殴った。また、彼はそこに止まらずに、悪魔の手を無実の中国人住民に伸ばした。「この数十日間、無辜の住民にたびたび危害を加えたことも、必要の有無にかかわらず、彼の名を無形の犯罪記録簿に、幾箇所も、幾十箇所も、書き入れたはずであった。」⁽³⁶⁾ 彼はもはや、中国人を守るために日本に対抗していた「梶」ではない。今の「梶」は国策によって戦争犯罪を強制されたのではなく、意志を持ち、そして意義の有無を問わず、

(34) 徳富蘇峰が『国民新聞』(1890年9月4日)に発表した評論のテーマ。

(35) 五味川純平、『人間の条件』、三一書房、1963年、p702。

(36) 五味川純平、『人間の条件』、三一書房、1963年、p905。

殺人を重ねた。人間を人間として扱おうとしていたヒューマニストはここまで墮落した。つまり、いままで築いていた人道主義は泡になった。主人公の「梶」は、一人で全日本国民の責任を背負おうとし、戦時「国家主義」の理不尽に反逆してみる。しかし、その巨大な統制政策は、一人の「梶」で揺るがざると言えよう。

おわりに

「満州」生まれ、「満州」育ちの五味川にとって、人生の三分の一の時間は戦争の中で過ごした。つまり、五味川は単なる戦争の傍観者ではなく、実際の参加者である。それゆえに、彼が見た「戦争」は多面的であり、それに対する考えももっと深刻で客観的である。彼は反省の意識を込め、『人間の条件』を始め、『自由との契約』や『歴史の実験』などの「満州」を舞台とする作品を次々と創作した。『人間の条件』の創作にふれて、五味川は「私の戦争体験をいちおう整理して、現時点へ早く復員をしたい、という気持ちでいました」⁽³⁷⁾と述べたことがある。

つまり、五味川文学は彼の「満州」体験という「土壌」で孕んでいたと言えよう。その体験があるからこそ、戦争と人間の絆を克明に描写できるだろう。「戦争と人間」は五味川文学を貫いている永遠の主題である。それは、「満州」体験がなければ、あるわけにはいかないものと言えよう。

小説は、作家が主人公「梶」の人生体験に着目し、「植民」「軍隊」「敗戦」という三つの面から戦争が人間性に対する抹殺を描写した。つまり一等国民の「植民者」としてヒューマニズムを守り、「軍馬以下」の「二等兵」としてヒューマニズムを見逃し始め、流離った敗戦棄民としてヒューマニズムを捨てた。最後に「梶」の「死」はヒューマニズムの破産を宣告した。これも、戦争と植民に対する無言の反逆と思える。

国家のあり方について、作家は作品を通して、隅々まで浸透される「国家主義」体制を猛烈に批判し、中国を侵略することや日本国民を圧搾するなどについて理不尽、非人情と描いている。そして個人のあり方については、作家は「梶」を借り国家の権威に挑戦した。結果として巨大な国家体制の前に個人の力不足が顕れ、比喩物にならないと認識させられている。つまり極端な戦争的背景下、

(37) 五味川純平、『極限状況における人間』。三一書房、1973年、p183。

「国家主義」と「個人意志」の両立ができないと分かるようになった。よって、作家の考えでは、国家統制下の戦争の極限状況において、「人間」として生きる命題は成立できない。ヒューマニストの彼が、やむを得なくこのような判断を下すことは、最終的な狙いではなかろう。「梶」の「死」を通じて、「国家主義」の深入りに伴い生産された「植民」の罪惡、「軍隊」の理不尽、「戦争」の不義さを批判し反省することは、根本的なものと思える。ただし、「梶」がずっとヒューマニズムを唱えているが、管理者だろうが、兵士だろうが、どの身分でも戦争に協力することであるため、嫌々ながらもとうとうやったというのも事実である。特に、無実の植民された人々に果て知れない傷害も与えた。これは、作家がまだ「精神的に復員できない」原因と思えよう。

戦争責任の審判結果はまだ明らかにならず、「一億総懺悔」の全体的無責任体系は全力で構築されていた戦後に、五味川純平が作家的社会責任を取り、『人間の条件』を創作した。彼がこの作品を通して、改めて戦争責任を清算し、日本植民者が直面したくない歴史的事実を文学の手段で世間に伝えるつもりだった。このような「反時代」の作品はまさにその時期に必要なが、ほとんど見えなかったのである。これが、日本文学史に対する補充であるとともに、戦後思想史の整理にも有力な参考になるのではないだろうか。今後、『人間の条件』のほかに、五味川純平文学に描かれた「戦争」、「国家」、「人間」の形象をさらに掘り出していきたいと思う。

参考文献

- 五味川純平、『人間の条件』。三一書房、1963年。
 五味川純平、『極限状況における人間』。三一書房、1973年。
 五味川純平、『虚構の大義—関東軍私記—』。文芸春秋、1974年。
 五味川純平、『戦記小説集』。文芸春秋、1993年。
 長谷川泉、『近代日本文学：鑑賞から研究へ』。明治書院、1958年。
 企画院、『国家総動員法令集』。内閣印刷局、1942年。
 小熊英二、『＜民主＞と＜愛国＞ 戦後日本のナショナリズムと公共性』。新曜社、2003年。
 五味川純平、「原点としてのわが戦争と人間」、『潮』、通号142。
 原口一郎、「自主こそ人間の生きる道作家五味川純平」、『産業』、23巻2号（通号257）。
 家永三郎、五味川純平、「近代思想史の欠落部分」、『思想の科学』、第5次、126号。